年間第１２主日

福音朗読　マタイ 10・26-33

2023.6.25　9：30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭　高木健次神父

今日の福音は、先週のところの続きですが、イエス様が１２人の弟子たちを人々の所に、神の国の福音を告げ知らせるために派遣される場面で、派遣されるに当たっての弟子たちにかけたイエス様のことばとして、「恐れずに人々の中で伝えなさい、言い広めなさい」そういう励ましになっています。

教会は全体として、イエス様のことを、そしてイエス様が示された神の国の生き方を人々の中に告げ知らせる使命を担っている。そのことを絶えず思い起こさなければならないわけですが、今日はちょうど聖ペトロ使徒座の献金日ということになっています。聖ペトロ使徒座というのは、簡単に言えばバチカンのことです。教皇様が世界中のいろいろな所に出かけて行ったり、日本のように、小さい教会ではあるけれども教皇様の費用を全部自分たちの教会で――全部ではないんですが――大部分を賄うことの出来る所もあれば、そういう所ばっかりに教皇様は行くわけではないんですね、必要と判断される所に出かけていらっしゃる。この度はモンゴルに行かれるとのことでした。モンゴルは人口も少ないんですけども、カトリック信者の数は国全体で 1,500 人だと聞きました。名目上の数としてはこの教会よりも少ないですね。でも必要とあらばそういう所にも出かけて行く。そのためには、モンゴルのその 1,500 人が教皇様のいらっしゃる費用を全部賄ってくださいというわけには当然いきませんね。世界中のカトリック教会が、自分の所のことだけではなくて、教皇様がいろんな形で働かれる、そのためにお支えする、そういう思いで呼びかけられている献金日ですので、どうぞそれぞれの可能な範囲でご協力いただければと思います。

教会全体としてはこのように教皇様を中心に、いろんな所にキリストの価値観を告げ知らせる、そして対話する、その使命を生きていると同時に、一人ひとりも福音宣教へと召されているというのは、もう何度も何度もお聞きになったことであると思います。しかし福音宣教を狭い意味で、キリスト教を知らない人に紹介するとか教会に連れて来るということだけに考えるならば、じゃあ誰かを教会に連れて来て、「ああ、これで自分の働きは終わりで、あとは神父様お願

いします」だったり、そういう自分自身のあり方とは関係ない形でとにかく宣伝すればいいのだというような考え方に陥る、そういう危険もはらんでいます。

わたしたちは、「宣べ伝える」ということは、何よりも信仰を通して頂いた、あるいは呼びかけられているその呼びかけに応えて生きること、それが土台になければならないと思います。信仰の呼びかけ、イエス様の呼びかけというのは、今日の福音の中にもありました。耳打ちされるような、あるいは暗闇で言われるような、はっきりとした声として聞こえてこない、むしろ小さいものとして体験することが多いわけです（マタイ 10・27）。

わたしたちの心の中には色々な声が――色々な望みというか、これをしたい、あれが大切である、こうなったら良い――いろんな声が渦巻いていますが、大きな声もあれば小さな声もある。しかし、必ずしも大きな声が、わたしたちが聞き従う、あるいは自分が本当に望んでいることとは限らないわけです。むしろ、聖書には、今日の箇所だけではなくて、神様のみ声というのはささやくような、あるいは耳打ちされるような小さなものとして体験するんですよ、というふうな表現がいろんな所に出てきます。しかし、わたしたちは自分の中に聞こえてくる大きな声、それは欲望の声だったり、自分の単純な願いの声だったり、「それに聞き従うことが本来の自然な人間のあり方なのではないかなあ」と、「無理しないほうがいいんじゃないかなあ」と考えてしまうときもあるのではないでしょうか。

人間の心のあり方は、キリスト教的には、３つの層から成っていると表現されることがあります。一番上の層は表面的な自分、ほかの人に見せるための自分ですね。取り繕って、良い人のように、礼儀正しくするようにしようとする。でも、それはほかの人に見せるための自分だから、ほんとの自分じゃないと感じることがあります。

その奥には自己中心の自分というのが居る。自分のために、あるいは自分の望んでいることが実現したい、人でも物でもいろんな機会でもすべてを自分のために使いたい、そういう自分が居る。わたしたちは時々それがほんとの自分であるというように錯覚してしまう。表面的な取り繕っているその一番奥にあるから、本当の自分というのはほかの人に見せられないような、自分のことばっかり考える、欲望に従っている、そういう自分の時がほんとの自分なんだ、と。だからこそ、そこから聞こえてくる声に従うのが自然なんだっていうふうな考え方に至るということも多いわけです。

でも、この福音は、「人間っていうのは、それだけではない。もっとその奥に神様がお造りになった本当の人間性が隠れているよ。そこに出会うように」と――それが聖霊が宿っている場、何か肉体の部分的なことということではあり

ませんけれども――自分の欲望、こうなりたいとかこうしたいとか、そのもっと奥に、イエス様のようにほかの人々を愛したい、イエス様のようにほかの人々のために自分を使いたい、そういう思いが埋まっている。それを神様の助けのもとに掘り起こしていくのが信仰の歩みであり、イエス様の呼びかけ、神様の声っていうのはそこから聞こえてくるから、心の中で一番地底の底から聞こえてくるので小さいんです。でもそれがだんだんはっきり聞こえてくるようになると言われている。

聞き従うべき声と、大きく聞こえてくるのだけどでもそうじゃない声と、どう見分けるのか。いろいろな信仰の先輩たちが体験を通して教えてくれる。その声に聞き従ったときに喜びが長く続くか、あるいは刹那的な一瞬の喜びで、あとにはまた不安になるかとか、心の平和の状態がどうかとか、色々ありますね。でもほんとに見分けるのは難しいことは確かだと思います。

でも、何よりもわたしたちの心の一番底から神様が、そしてほんとの自分が呼びかけている。そういうことに信頼する。そして「聞き従って行きたい。どうぞ見分ける知恵を、基準を与えてください」と願い続ける、その姿勢がなければ、やっぱり心の中に聞こえてくる大きな声――聖書の中では悪霊っていうのは大体叫んでいますね――その大きな声に聞き従ったほうがほんとの自分なのかなあ、というところに戻ってしまい、神様が出合わそうとしているまことの幸せに到達できないし、人々の中でそれを証ししていくこと、またほかの人にも同じように助け合いながらまことの幸せに到達する、その歩みが途中で止まってしまうということになるんだろうと思います。

ですから、いろんな形で告げ知らせることに招かれているけれども、それは基本的には生きる、自分たちが告げ知らされたイエス様との出会いに基づいて生きるためである。そのことを思い起こしながら、小さな声で聞こえてくるイエス様の呼びかけ、まことの幸せに導こうとされる呼びかけに従う、その思いを絶えず新たにしていく、そのことを通してこのごミサをお捧げしたいと思います。

それぞれの場で、この教会で、全体として、また一人ひとりとして、イエス様の呼びかけに耳を傾ける、そして従う、その思いを新たにして、教会のために、またここに集まった人、集まれない全ての人のために導きの恵みを願いながら、このごミサをお捧げしたいと思います。

――

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC　http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi

携帯　http://www.koenji-catholic.jp/mobile/